

日本ユニセフ協会大使

アグネス・チャンさん

ひとりひとりがユニセフ大使 インタビュー



大使に就任して1年。子ども買春の現状視察にタイを訪問するなどアグネスさんの精力的な活動はテレビ等でご覧いただいているとおりです。

今回は、この1年を振り返っての感想や先生方・子どもたちへのメッセージをおうかがいしました。

-- 最近、「ユニセフの大使になりたい」という子どもたちの声が届いています。

A：子どもたちがユニセフ大使になりたい、と聞いて、とてもうれしいです。ユニセフの活動や子どもたちの現状を多くの人に分かってもらうために、マスコミに出たり、街頭募金をしたり…。どのような仕事でも子どもたちのためになるんですよね。だからとてもやりがいのある仕事です。

それに、わたし、日本の子どもたち一人ひとりが自分の分身だと思っているんです。ちっちゃい大使というのかしら。本当に世界の子どものことを思って、なんとかしたいと思って、いろんな人に話をする人はみんな大使ではないかと、わたしはそう思っていますから。

-- 1年の仕事で印象的だったものは何でしょう。

A：タイへ行ったことですね。バンコクとチェンライに行き、そこでとてもひどい仕事をさせられている子どもたちに会いました。難しい言葉だと、商業的性的に子どもたちが使われている。つまりおとなたちが子どものからだを買っている、ということなんです。子どもたちに会ったり、話を聞いたりして、子どもたちが学校に行けて将来の夢をみられるようになってほしい、と心から思いました。

-- この件については、日本でも子ども買春や子どもポルノの加害者を取り締まれるように法整備が進んでいますが、その大きな力になったのではないのでしょうか。

A：この視察によって、またこれをいろいろな人に話したことで、世論が動き、法制化の動きが出てきた、と感ずることができました。

代議士の方にも会いました。忙しい時期ですが、みなさん、このことを忘れていない、ということを実感しています。

罰則がつく法律なので、すぐにというのは難しいらしいのですが、忘れられていないのが幸い、と思ってがんばっています。

-- 忘れない、ということが大切ですね。

A：そのとおりです。毎日忙しいけど、紛争下の子どもたち、食べられない子どもたち、働いている子どもたち、病気になっても薬もない子どもたち、そういう子どもたちのこと忘れないでね、ということがわたしの一番の役割だと思っています。

-- 日本の子どもたちがそうした世界の情勢や子どもたちのことを理解するためにはどんなふうになればよいでしょう。

A：一番いいのは、一人ひとりが現地に行って、現状を見てくことだと思いますが、それは難しい。なら、スライドや写真、声、映像などがいいと思います。それに今はコミュニケーションしようと思えばいろいろな手段が可能になっています。学校にインターネットも導入されると聞いていますし、いろいろとアクセスして情報を集めれば伝わることは多いと思うんです。

-- アグネスさんも講演などでそうした状況を伝えようとしていらっしゃると思いますが、理解してもらうためにどのようなことを大切にしていますか。

A：とにかく、精一杯、心をこめて、一生懸命話すしかないんです。この話、なんべんもしたことがあるのに、何でまた泣いてしまうんだろう、何でめまいがしてしまうんだろう、とか思いますが、それだけ一生懸命話せば伝わると信じているんです。

-- 生徒に伝える先生にも同じことが言えるでしょうか。

A：先生ってというのは、とても影響力が大きいですね。先生たちが本当に自分の心を開いて、世界の子どもの現状に



昨年訪問したタイで子どもたちと © 日本ユニセフ協会

ついて感じたこと、たとえば、「本当に子どもたち大変だと思うのよ」とか「学校がないの。学ぶチャンスがないのよ。わたしも先生だから、行って教えてあげたいけどできないのがやさしいのよ」というやさしい面を見せてあげてくれれば、きっとわかってくれると思うのです。人にやさしくなったときって、ちょっともろさを人に見せるときだと思うんだけど、それを恐れないでほしいと思います。



© 日本ユニセフ協会

アグネスさんの訪れたタイでは約20万人の子どもたちが買春の犠牲になっています。小学校卒業前後の村の少女たちがブローカーにだまされて連れてこられるケースも後をたちません。多くの子どもたちがHIVに感染するなど悲劇的な現実に向き合っています。滞在していたチェンライのホテルで、どう見ても10歳くらいにしか見えない女の子が濃いアイシャドウと真っ赤な口紅をつけてお客についていくのを見た夜は、ショックで眠れなかったとアグネスさんは語ってくれました。

-- アグネスさんのお子さんもユニセフ支援活動に参加してくださっていますね。

A：旅から帰ると、スライドや写真を見せながらお話しするんです。こんな子どもたちがいたよ、とか、こんなことしてたよ、とか。ちいちゃん子どもでもちゃんとわかります。自分が恵まれている、ということを実感しているようで、人のためにできることがあるときは張り切ってやっていますね。

街頭募金などもやっていますが、子どもにすごくいいと思うのは、簡単にはお金をいただけないこと。だから、もらったときはうれしい。そして、そのお金が子どもたちのところに行くって実感するんです。結局は自分にはねかえってきて、とてもいい体験になります。これはおすすめですね。



-- 街頭募金は達成感がありますね。

A：ちょっと大変な思いをしなければならないと、やり終わったときに、子どもたちは、ああやったあ、っていう気持ちになるんですね。親から1000円、2000円もらって募金するのは、苦労しないの。でもね、街頭募金で500円、1000円集めるのはす



UNICEF TOPIC

世界から子どもの兵士をなくそう

-- 小淵総理へ訴え --

現在、世界には18歳未満の「子どもの兵士」が30万人もいます。日本ユニセフ協会では昨年9月下旬より「世界から子どもの兵士をなくそう」というキャンペーンを実施し、署名活動を行ってきました。3月11日、日本ユニセフ協会大使アグネス・チャン一行が26万5千人(2月2日現在集計分)の署名を持って小淵総理を訪問し、子どもの権利条約で定められている徴兵と戦闘への参加年齢を現在の15歳未満から18歳未満に引き上げるための選択議定書の早期採択と、子どもを兵士に徴用した当事者の刑事責任を追求できる国際刑事裁判所の設立の実現を求めました。



© 総理官邸写真室

ごく大変なんです。バザーで物を売ったりするのも、なかなか売れないんです。これがいい。1日やっても5000円、6000円、それでもいい方。お小遣いやお年玉ほど集まらないんです。そうすると、いろんなことがわかるんですね。

-- 現在、全国の12000校以上の学校(幼稚園、大学等含む)がユニセフ募金に協力してくださっています。

A：本当にたくさんの協力、感謝します。子どもたちが子どもたちのことを思うというのはとても素晴らしいことだと思います。先生方の協力がなければできなかったでしょう。

わたしも小さいころからボランティアをやっていたおかげで、自己中心的な考えから救われました。そのとき、まわりのことを考えた方が自分も幸せになれるんだってことを実感しました。わたしみたいな人でも一生懸命がんばれば、だれかが助かる、そういう気持ちを得たのです。そのような達成感や自分だけが大切なのではない、というような考え方を植え付けることができれば、子どもたちの心、もっとひらきます。



-- 著書でも人を大切にすることでうまれる喜びもある、ということを書いていらっしゃいますね。

A：たとえば、中学生などは自分もつらい時期ですよ。でも世の中は中学生に厳しい。一番余裕がほしいときなのに。だから、こういう時期に先生方が、ひとつの価値観だけでなく、いろんな人たちに会って、もっと自分を信じて、いい人になることを恐れないで、そういうことを考える機会を提供してほしいと思います。

自分は誰からも必要とされていないんじゃないかって思うことがある。でもそれは違う。毎年1200万人もの子どもたちが5歳を迎える前に命を失っている。みんなあなたを必要としているんだ...。それに気付けば、やる事が多くて、悩んでる場合ではなくりますよね。

-- アグネスさんは12年ほど前に日本ユニセフ協会主催のラブウォーク(参加費が募金になるイベント)に参加してくださったのがユニセフに関わるきっかけになったとか...

A：長男が生まれて、子どもも参加できるものって考えたときに、ラブウォークがあったんです。赤ちゃんを背負って行ったら、すこし目立っちゃって(笑)。小さいときからこうしたものに触れたり、仲間たちに出会ったりするのはとてもいい機会だと思います。ぜひ、学校や地域でもやってみてほしいイベントですね。



© 日本ユニセフ協会

成立が急がれる「子ども買春・子どもポルノ等禁止法案」は3月31日参議院に提出されました。また、アグネスさんは今夏、内戦と干ばつの続くスーダンを訪問し兵士だった子どもたちに会う予定です。

イラスト © 牛嶋浩美

アグネスさんの著書



『みんな地球に生きるひと』
『みんな地球に生きるひとPart 2』

アグネスさんのターニングポイントとなったアフリカでの体験や、これまでに出会った各国の人びとの交流などがゆたかに描かれています。